イエスはそれを見て、憤って弟子たちに言われた。「子どもたちを、わたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神の国はこのような者たちのものなのです。」 マルコの福音書 10 章 14 節

本日は「子ども祝福式」を行います。日本においては、この時期「七五三」を行います。神社に出かけ、我が子のこれまでの無事を感謝し、これからの健やかな成長を願う儀式です。

日本においては「子は宝」と言う言葉があるように、昔から社会全体で子どもを大切に扱う文化があったようです。といっても、それは当時の医療が未発達であったり、衛生環境が悪かったために乳幼児の死亡率が非常に高く、子どもが生まれて無事に大きくなること自体が神仏の守りによると考えるほど奇跡的なことだったからでしょうし、家を存続させる「跡取り」、農家や商家にとっては家を支える貴重な「労働力」として大切な存在と捉えられていたためと思われます。子どもを一人の人格と捉えるのは、ある意味、現代に入ってからと言えるでしょう。

古代の文明国とされたギリシャ・ローマにおいてはどうだったでしょう。子どもは一人の人格を持った存在とは考えられていませんでした。将来、大きくなれば、国家のために役立つ「労働力」あるいは「兵力」になると考えられていましたが、子ども自体には何の価値もありませんでした。ですから、女子に教育は施されませんでしたし、第３子以降の男子は名前もつけてもらえなかったそうです。捨て子もたくさんいました。

イスラエルではどうだったのでしょうか。聖書の教えによって、子どもは神様からの尊い賜物、祝福のしるしと考えられてきました。とはいえ、律法を守ることを大切に考えるユダヤ社会では、律法を十分に守ることのできない子どもは未熟者とみなされ、聖書の記録にあるように、女性と共に子どもは「人」としての人数に数えられませんでした。

本日の聖書の出来事を見ていきましょう。連日、さまざまな人たちがイエスのもとにやってきます。そこに、子どもを連れた人たちがゾロゾロとやってきました。みな、イエス様に我が子を祝福してもらおうと来たのです。ユダヤでは、子どもを偉大な人物のもとに連れて行って祝福を授けてもらう習慣が昔からあったようです。健やかに育ってほしい、立派な人物になってほしいという親心でしょう。ところが、弟子たちは、はるばるやってきた彼らを叱り飛ばしました。

イエス様の元には、毎日、病人や悪霊つきが癒しを求めて大勢やってきます。イエスを論破してやろうと律法学者やパリサイ人たちもやってきます。そればかりか、イエス自身、これから自分は多くの苦しみを受け、長老たち、祭司長たち、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日後によみがえらなければならないとおっしゃって、ただならぬ雰囲気でエルサレムに向かっているところでした。そんな中、我が子を祝福してもらおうと呑気にやってくる人たちを見て、「尊いイエス様にわが子を祝福してほしい？そんなことでお忙しいイエス様のお手を煩わせるとはもってのほかだ」と弟子たちは思ったのでしょう。「叱る」という言葉には「値踏みする」という言葉から派生した言葉です。「これは相応しい、あれは相応しくない」、そこから転じて「評価する、非難する、勧告する、叱る」という意味を持つようになりました。

「何か大きな目的がおありのイエス様の手をこんな小さなことで煩わせたくない。」「いつもイエス様の側にいて、イエス様から教えていただいている自分たちが、お忙しいイエス様を守らなくては。」

イエス様のことを考えて、イエス様のもとに来る人々を値踏みし、イエス様のもとにいくに相応しいかどうかをより分けたのです。全く悪気はありませんでした。イエス様のために、イエス様の負担を少しでも軽くしようと。

でも、イエス様の基準と弟子たちの基準は全く違っていました。とんでもない勘違いをしているのです。

その様子を見ていたイエス様は「憤った」のです。単なる怒りではありません。これは、「心身の大きな苦痛・痛みを感じる、悲しみと憤りの両方の感情が含まれる」言葉にそれを強調する「非常に」という言葉がついた、深い感情を伴う強い言葉です。イエス様の前に立ちはだかって、「帰れ、帰れ」と子どもを連れた親たちを追い払う弟子たちに対して、イエス様は心の深いところから強い憤りが湧いてきたのです。

実は、これは私たちにとって人ごとではないかもしれません。「あの人はまだ洗礼を受けるには早いでしょう」「私はこの奉仕にはふさわしくありません」「どうしてあの人がこの奉仕をしてるの？」「こんな人が教会に来るの？」こんなふうに思ったこと、言われたことはないでしょうか？弟子たちの失態を笑えません。

そしておっしゃいます。「子どもたちを私のところに来させなさい。邪魔をしてはいけません。」親に連れられてきた子どもたちは今やイエス様に向かって遠慮なくやって来る。それをそのまま来させなさい。それを邪魔をしたり、阻止してはならない、というのです。その理由は「神の国はこのような者たちのものだから」というのです。

そして、極めつけは 15 節。「まことに、あなたがたに言います。」これは大事なことを言う時のイエス様の決まり文句です。「よく聞きなさい！」「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決して神の国に入ることはできません。」キーワードは「子どものように」です。

さあ、皆さんにお聞きします。どうして「子ども」なのでしょう？「子ども」とはどんな存在ですか？それがわからなければ、私たちも神の国、天国に行けないのです。私たちが天国に行けるか確かめられません。今日、子どもたちを祝福する場合ではないかもしれません。「子ども」とはどんな存在でしょうか？「素直」「無邪気」「純粋」「守ってやらないといけない弱い存在」「自己中心」「わがまま」…。「子どものように神の国を受け入れる」とはどうすることでしょう？「素直に受け入れる？」「疑わず純粋に聴いたままを受け入れる？」ことでしょうか。

皆さん、今イエス様の前にいる子どもたちは、どうやってここにいるのでしょう？「親に連れて来られた」のです。自分の意思ではありません。ここで言う「子ども」はそれこそ、乳飲み子から親に手を引かれて歩いて来られるくらいの子どもまで、を指します。親が行こうと言うから来ました。自ら望んできたのではないでしょう。親や周りの人たちの世話になり、その優しさ（愛情）に身を委ねることに満足している存在です。自分では生きられません。無力で何もできない、誰かの世話が必要な存在です。全く他者に依存しています。与えられる物を疑わず信じてもらう。そうやって生きている存在です。何の業績も徳もありません。全くの無力です。ずる賢いところもあります。我が子がまだ一歳にもなっていない時、ニコーッと笑って、やってはいけないことをしたのを忘れはしません。罪人なんだって思った瞬間でした。

子どもは守り育ててくれる存在がなければひとときたりとも生きていけません。同じように、私たちは神様の方から手を伸ばしてもらわなければ、自らを救う手立てを全く持っていない無力な者です。子どもがそのまま手を出して親が与える物をもらうように、神の国、天国は、ただそれをくださる神様から受け取るだけ、神様からの贈り物であり、人間が何か自分で成し遂げたご褒美として受け取るものではありません。本来、人間には全く受ける資格などないのです。ただ受け取るだけです。「入る」という言葉に「ウ・メ」と強調する言葉がくっついていますが、「絶対に」入れないのです。

16 節。イエス様は子どもを「抱く」とありますが、「抱き寄せて腕の中に入れる」様を表す言葉です。イエス様は、一人ひとりの子どもを愛おしく抱き寄せられました。そして、「繰り返しくりかえし手を置く」と言う表現ですから、一人ひとりに手を置いて祝福し続けました。何と美しい光景でしょうか！これがイエス様です。

王の子どもは、王にふさわしく教育されます。日本において、それを肯定するのではありませんが、天皇の家に生まれた子どもは、将来天皇になるべく教育されます。私たちは、神様からの贈り物として「神の子」とされましたが、その姿は全く神の子として相応しくありません。神の子としてふさわしく教育するのが教会です。神の子である子どもたちをそれにふさわしく教育するのが親であり教会です。子どもを教育する責任は親にあります。学校や塾ではありません。学校は、教育の一部を委ねているに過ぎません。ですから、学校で何が教えられているか、親はきちんと見ていなければなりません。そして、もし学校に適切でない部分があれば、子どもたちを守るため言いにいかなければなりません。

教会はそれを助けます。子どもたちのために祈ります。子どもの両親のために祈ります。日曜日には一緒に礼拝します。神様に愛されていることを教えます。神様に赦されていることを証しします。神様から使命が与えられていることを教えるのです。天国の希望を伝えます。両親が、教会の大人たちが主を信じて喜んで生きている姿を見て、子どもたちは神様の存在を実感します。苦しい時に必死で祈る姿を見て、子どもは祈りを学びます。子どもに対して間違ったことをしたり、言ったりした時、親が子どもにちゃんと謝る姿を見て、神様の赦しを学ぶのです。

毎日、家庭礼拝をしましょう。聖書を読んで、我が子を抱きしめ、子どもの頭に手を置いて祈りましょう。

皆さんのご家庭が、主にあって神の国となるよう祈ります。